
女の子の夢

水守中也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

女の子の夢

【Nコード】

N7596R

【作者名】

水守中也

【あらすじ】

女の子の夢が詰まった作品です。

ただ下ネタが苦手な人は……すみません。

女は愚かな生き物である。

子供は知識が乏しく突拍子もない行動に出る生き物である。

異論もあると思うが、一般に言われていることである。

この二つから、もっとも愚かな存在は、女の子供と導き出されるわけだが……

これは、とある女子小学生たちの黒歴史の話である。

中島三月と古屋あんりは、小学六年の同級生の腐れ縁である。今日は、あんりの家に三月が遊びに来ており、あんりの部屋でDVDを見ながら焼き芋を食っていた。なぜ焼き芋なのかというと、小腹がすいたときにたまたま、焼き芋屋が家の前を通ったからである。もし家の前を通ったのが豆腐屋だったら、二人が頬張っていたのは豆腐であつたことは間違いない。

「あつ、やばい」

焼き芋をすべて腹の中に収めた三月が言った。「おなら出そう」

二人は腐れ縁。いまさらおならの一発や二発、遠慮する間柄ではないが、一応断るのが乙女のエチケットである。だがしかし、

「そのおなら、ちよつと待ったーっ」

芋を片手に、あんりが遮った。

「何よ。別にいいでしょ」

「そうじゃないのだ。もしかすると、世紀の大発見をしてしまったかもかも」

あんりが得意げに言い、残った芋を口の中に放り込んだ。

「大発見？」

「もぐもぐ……そう。これはわれわれ女の子の夢が詰まった画期的なものかもしれない！」

「ほうほう。で、発見って？」

三月は期待せずに問う。それに対し、あんりは逆に三月に問いかけた。

「おならって、ガスだよな？」

「うん。ライター近づけると大爆発起こすんだよな？ お尻やけどしたくないからやだけど」

所詮、小学生の知識である。

「ガスってことは空気より軽いんだよな？」

「うーん。どうなんだろ。重いつて聞いたことあるような気もするけど」

「でもでも、風船とかのヘリウムガスってのは、空気より軽いんだよな」

「そうだね。で、何が言いたいわけ？」

三月が問うと、あんりは立ち上がり、右手を某農学校の博士みたいに斜めに延ばして宣言した。

「ずばり、『おならをお腹の中にためることで、体重を減らすことができる』かもしれないのだ！」

「おーっ」

気のない返事をする。三月はどちらかというと、おしゃれするより男子に混ざって体を動かすタイプである。まだダイエットに興味はない。とはいえ、自分と同じ体格であるあんりより体重が重たかったら、それはそれでなんか負けた気がするという、微妙な乙女心も存在する。

「むう、なんかあんまり感心した風には見えないのだ」

「うーん。だって……あっ」

ぶぼぼぼぼ……

三月の尻から、およそ女の子っぽくない気体の連弾が噴出された。

「あああっ、女の子の夢がーっ」

「そっちかいっ。ていうか、尻を触るなっ」

尻の出口を押さえようと手を伸ばしてくるあんりを叩く。

「でもさ、空気より軽くて、0よりは大きいんでしょ？ だった

ら重くなる気がするんだけど」

「いやだから、風船を思い浮かべるのだ。上に上がっていくでしょ。あの中身の気体は0グラムより重いかもしれないけれど、体重計に乗っても針は動かないはずなのだ」

「あ、なるほど。確かに……」

「つまり、おならをお腹にためることによって、人は空をも飛べるかもしれないのだ！」

「すごい、これは体重云々じゃないよ。人類の夢が詰まった大発見かもしれないよっ」

三月は感動した。涙こそ流さなかったが、マジで感心した。

……だが、この結論を導き出すためには、ひとつの要素を確定させることが必要不可欠である。

「でもふーちゃん（苗字の古屋から取ったあだ名）の理論を証明するには、おならが空気より重いか軽いかが重要なんだよね」

「うん」

「じゃあ実験するしかないね」

「オーケー。来たきたキター、もういつでも準備完了よ。ちゃんと受け取りなさいよ」

「さー、いえっさー」

三月は友人の学習机に前向きに乗っかり、股を開いて尻を突き出した。あんりは机の方に頭を向けて、仰向けに寝そべった。

もしあんりのもとに悪臭が漂えば、おならが空気より重いことが証明される。

「それじゃ……いくよ」

「ばっちこーいっ」

3・2・1……

ぷう

「ど、どう？」

「うう、臭いのだ。なんでお芋はあんなにいい香りなのに、三月の

お腹を通すとこんなになるのか、神秘的なのだ」

「うるさいっ。それより、机より下で匂ったってことは……」

「結論、おならは空気より重い、ってことだねえ」

「はあ」

三月は向き直って机に腰かけながら、ため息をつく。ため息も空気より重そうだ。実際、二酸化炭素が多めなので空気より重い。

だが自らの元に自らの悪臭が襲い掛かったとき、三月は気づいた。「あ、でもさあ、普通に立っっておならしたとき、普通鼻はお尻より上にあるよね？　なのに何で匂うわけ？」

雑誌で部屋中の空気を仰いでいるあんりが手を止めた。三月に匂いが届いたのはそのせいかもしれないが、三月の「鼻はお尻より上」説は真理である。

「ふむ。もしかするとおならにも体調や個人差があるのかもしれないね」

「じゃあ今度はふーちゃんがやってみてよ」

「あたしは三月みたいに、お芋を食べたからっっておならが出るほど単純じゃないのだ」

「悪かったな。単純で。あ」

「どしたん？」

三月は答えた。

「なんか、変におならを我慢したり出したりしたせいか、今度は気体じゃなくて、実が出そう」

ぽつりと漏らした言葉に、二人は一斉にひらめいて、顔を見合わせて叫んだ。

「それだっ！」

トイレに駆け込んだ三月は、用を足したのち、身の軽さを実感したのだった。

【結論】 体重を減らすには、おならを我慢するより、実を放出す

べき】

二人は手を取り合い、世紀の大発見を喜んだ。

ちなみに、帰り際に冷静になった二人は、馬鹿なことをしたと感じ、「結婚披露宴の友人挨拶でお互いにこの話を暴露しない条約」を締結したという。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7596r/>

女の子の夢

2011年3月20日09時57分発行